

「チュラーロンコーンスプリングスクールプログラム参加報告書」

京都大学法学部 4 年 齊藤 侑奎

今回のプログラムでは、主として①タイ語の学習②チュラーロンコーン大学生との共同発表③課外活動を実施した。課外活動の中では、アユタヤ遺跡見学、アジアンティーク(タイボクシング)見学、寺巡りを行った。

このプログラム全体を通して、私に関心を持ったことが 2 点ある。

(1)日本人とタイ人の笑い方の類似点

1 点目は、日本人もタイ人も、間違えた時にはにかんで笑うことがある点である。日本人は、質問で上手に答えられなかった時や発表などで言い間違えた時にはにかむように笑ってごまかすことがよくあるように思う。私は以前、弁論大会に出た際に、指導教官に「それは国によってはとても失礼な態度であるから、絶対にやめなさい」と注意されたことがあった。その為、海外の場では失敗した時に笑うことは極力避けるように心がけていた。しかし、チュラ大生も発表の際、小さな言い間違いをすると、はにかむように笑うことが何回かあった。その笑い方は、本当に日本人と同じようなはにかみ方で、私は驚いた。このような日本との類似点は、私にとって予想外のものであった。

(2)観光スポットのあり方

2 点目は、観光スポットのあり方である。特に考えさせられたのは、バンコクで何百匹も並ぶパンダの模型である。広場一面に並ぶパンダの風景は「圧巻」の一言で、多くの人々が写真を撮りに来る、観光スポットとして成立している。実は、このイベントは期間限定で、国際会議に合わせて WWF という NPO の自然環境保護団体が、パンダの絶滅危機を訴えて行ったものである。今までに見たことのないような景色を見ることは、私自身楽しめた。しかし、「このたくさん集まっている人の内、いったい何人が団体の主義やイベントの目的を分かっているのだろうか」と疑問を覚えたのも事実である。観光スポットを訪れる際には、純粋に楽しむことに加え、その背景を知るのも重要ではないだろうか。観光スポットにおける、「集客を増やすこと」と「主催者のメッセージを伝えること」のバランスの難しさを感じた。

今回痛感したことは、自分には物事を判断する基準となる物差しがないことである。その為、はっきりと自分の意見を持ってない場面があった。まずは、自分の物差しとなるような、得意分野をつくりたいと思う。私は 4 月から社会人になる。まずは自分の業界、自分の仕事に対する知識技能を身に付けて、それを自身のバックグラウンドにしていきたい。そして、自分の考えを持った上で、価値観の異なる人と交流し、さらに新たな知識や考えを吸収していこうと思う。

